



左/ Left: 川井雄仁/ Kazuhito Kawai, 永井博とシティ・ポップ/ *Hiroshi Nagai and City Pop*, 2020, 陶/ Ceramic  
右/ Right: 梅津庸一/ Yoichi Umetsu, 花粉濾し器/ *Pollen Strainer*, 2019-2020, 陶/ Ceramic

## 二人展 川井雄仁・梅津庸一

### LOOP な気分で SHOW ME 【土塊】

2020年2月15日(土) - 3月7日(土)

オープニングレセプション: 2月15日(土) 4:30 - 6:00pm

現代美術 艸居

京都市東山区古門前通大和大路東入ル元町 381-2

開廊時間: 10:00-6:00PM 定休日: 日・月



## プレスリリース

この度、現代美術 艸居では、二人展 川井雄仁・梅津庸一「LOOP な気分で SHOW ME 【土塊】」を開催致します。本展では川井の新作 10 点、そして梅津にとって初の試みとなった「陶芸」作品と、それにちなんだドローイングを展示いたします。今展は川井が梅津に声をかけることで実現しました。2018 年にアートバーゼル香港で梅津の作品を見た川井は梅津作品の少年っぽさ、ジョルジュ・スーラとは違うノイズのような点の集積による絵画作品の不可解さに惹かれたと言います。

二人はともに 1980 年代に生まれ、川井は茨城、梅津は山形という地方都市で育ちました。昨年初めて出会った二人の共通の関心ごとが、美術ではなく 90 年代の J-POP であるということは地方都市における文化受容の均質さを物語っています。また二人はバブル崩壊後に「社会人」の年齢を迎えたいいわゆる「ロスジェネ世代」にあたります。世代だけでは区別しきれませんが、80 年代～90 年代のインフラや生活環境からの影響を大きく受けた世代であると言えます。

「現代美術」は今、どのように定義し得るのか、そして「陶芸」という伝統ある分野と交差するとき、どのような展開が期待できるのでしょうか。「陶芸」もまた「洋画」、「日本画」、「彫刻」のようにメディアムと制度に規定された一つのジャンルなのか否か。二人はそれぞれ伝統的な「陶芸」の世界から一定の距離をとりながら土や釉薬と即物的に向き合っています。実用的な「器」のアレンジに終始することもなければ、八木一夫やイサム・ノグチの影がちらつくこともありません。二人の「陶芸」作品の共通点は極めて具体的なエピソードを抽象化している点です。抽象といってもかたちを幾何学に還元するのではなく、物質の持つ厄介さや欠点を積極的に抱え込みながら従来の「陶芸」の規範から大きく外れた作品を生成しています。しかしそれは直ちに先行世代に対する「新しさ」を担保するわけではありません。現代美術っぽい雰囲気だけを漂わせるプロダクトに陥ることなく、過去の事例のありえたかもしれない別の可能性を浮かび上がらせるような作品を二人はそれぞれに目指しました。

川井は、ロンドン芸術大学チェルシーカレッジオブアートにて現代美術を学び、一度は美術から離れたものの、地元である茨城県の笠間で「土」という素材と出会うことで、制作活動を再開させました。川井の作品は「器」という形式を中心に据えて展開しています。しかしながら極めて複雑な造形とテクスチャーを有しているがゆえに、生活に根ざした「用の美」からはかなり逸脱しています。川井の「器」は用途性があるわけではありませんが「彫刻作品」というわけでもありません。川井の陶芸は現代の私たちが生活のなかで「使う」ための陶芸ではなく、作品を見た鑑賞者の目や知覚をなかば強制的に「使わせる」という性質を持っています。



梅津はこれまで一貫して絵画や美術が生起する地点に強い関心を抱きながら活動してきました。絵画制作だけでなく、映像作品や、私塾の運営や展覧会の企画、テキストの執筆など様々な方法でアプローチしてきました。今回、「陶芸」という新しいメディウムと出会うことで、梅津はこれまで見せることのなかった一面を表出させました。本来、絵画は永続性を志向するメディアですが物質として耐久性があるものではありません。しかし「陶器」は物理的衝撃を与えなければ時代を超えて半永久に存在していきます。そんな絵画とは違った時間を内包した陶芸というメディウムで梅津は「花粉濾し器」、「戦艦加賀」、「パームツリー」、「陽が差し込む部屋」などを制作しました。今後これらは梅津の体系の中でどのように位置付けられ、使われていくのでしょうか。

茨城の工房で 90 年代の J-POP を延々とループ再生させながら昼も夜も関係なくとり組んだ二人が生成した陶芸作品を是非この機会にご高覧いただけますと幸いです。

プロフィール：

川井雄仁（かわい・かずひと）

1984 年茨城県笠間市生まれ。ロンドン芸術大学チェルシーカレッジオブアートにて現代美術を学び、帰国後に陶芸と出会う。現在は茨城県笠間市にて制作を行う。主な展覧会に

『Naughty Loneliness』（Sozo Salon、2018 年）、『The Kitsch』（t.gallery、2019 年）。出展アートフェアに『アート京都』（2019 年）、『Design Miami』（マイアミ、2019 年）、『Art Basel』（マイアミ、2019 年）。主な収蔵に高橋コレクションなどがある。

梅津庸一（うめつ・よういち）

1982 年山形生まれ。美術家、パープルーム主宰。美術、絵画が生起する地点に関心を抱く。自画像をはじめとする絵画作品やパフォーマンスを記録した映像作品の制作、展覧会の企画、論考の執筆などの活動に加え、制作／半共同生活を営む私塾「パープルーム予備校」を運営など多岐にわたる活動を展開している。主な展覧会に『未遂の花粉』（愛知県美術館、2017 年）、『恋せよ乙女！パープルーム大学と梅津庸一の構想画』（ワタリウム美術館、2017 年）。作品集に『ラムからマトン』（アートダイバー、2015 年）。

是非、貴誌・貴社にてご紹介いただけますと幸甚に存じます。掲載用、写真の貸出などご質問がございましたら下記までご連絡頂きますと幸いです。

プレス担当：元林久美子

〒605-0089 京都市東山区古門前通大和大路東入元町 381-2

motobayashi@gallery-sokyo.jp Tel: 075-746-4456 Fax: 075-746-4457